

Title	生活の科学的考察：佷態論：生活をトータルなものとして見た場合の構造と機能(続)
Author	持田 照夫
Citation	大阪市立大学生生活科学部紀要, 30 卷, p.195-215.
Issue Date	1983-02
ISSN	0385-8642
Type	Departmental Bulletins Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学生生活科学部
Description	総説
DOI	

Placed on: Osaka City University

〔総説〕 生活の科学的考察

侶 態 論

生活をトータルなものとして見た場合の構造と機能

(続)

持 田 照 夫

Scientific Consideration of Living Actions
on the Man and Environment System

“YÛTAIRON”

The Structure and Function of Life System

Regarded as a Whole

TERUO MOCHIDA

0 侶態論の思想と目標

1 人間生活の特性

1) 生活は無生物→生物→人間活動へと進んで来た物質運動の一つであること、2) 物質運動には大分け小分けの段階があり、その夫々に運動の特性、結合や対外対内の特性があること、3) 生活の特性は動物と異なり、加工物の摂取、食寝以外の文化を含む生活の成立、生活用物資を捕捉・持来・加工して供給する“世話体”つまり「家族」「家庭」及びその変形がある等の諸点である。

2 生活研究の特徴

4) 生活主体の“生活要求”に対し生活用物資や条件を整える“世話体”とその環境である“社会”が或る形でこれに対応すると言う考えを持つこと、5) 生活主体の各生活の“生活要求”が何であるかを追究すること、6) “生活要求”と“供給条件”とを組み合わせる「実現可能な生活の姿」を描き出すこと。これにはその案が段階状に連なる“矛盾”のどこまでのものを解決しているかを明示すること。これが「生活計画」である。7) ただこれを行なうためには“生活矛盾の段階的な配列”を知らねばならない。この追究の結果生まれるのが「生活規準表」であり、何らかの意味で生活の価値的評価をしてそれを段階づけたものが「生活基準表」である。侶態論ではこれらの諸事項を探る。

以上のことを要約して表にして見ると以下のような

生活＝物質運動の一形態

物質運動の段階＝無生物（素粒子・原子・分子・高分子）

↳生物・生態

（個体の運動的特性及び集団・個体の対他生物・環境の間の運動様式）

↳人間の運動（生活）

（個体の運動的特性及び集団・個体の対他生物・他人間・他集団の間の運動様式）

新しい生活（生活設計）

＝生活計画

＝部分的生活様式・生活法則の結合

＝新しい法則体の構築

生活・生活集団・社会・国家

社会の見方

1 侶態論

——生活に関する認識論と主題論——

0 趣旨

前年度紀要掲載の内容で説ききれなかったことを述べる。前年よりも、思考が進んだところもある。

1. 「生活」とは何か：—それは“物質運動の一形態”である—

i) 生命—生活

前世紀から今世紀にかけて、物理学・化学が物質の運

動を対象にした科学であり、その運動法則を究めるものであると言う認識が打ち立てられ確立・定着したが、生物学についても生物と言う対象の運動法則を究める学であると言う認識が確立して定着に向っている。これは、ダーウエンによって発見された生物進化の法則を認めることから始まって、メンデルの遺伝の法則の発見、細胞説、ホメオスタシス、遺伝子の構造と機能の発見、遺伝機構の分子構造的確定等、個体の生物体を対象にした運動法則の解明・認識に及んだのである。また、個体間の相互作用、環境との関係を扱った生態学も生まれた。

このような学問の展開は、物事の認識を深め人間の物事に対する認識力を高めたが、実は個体に関する学問、個体間・個体環境に関する学問でまだ認識が固まっていない側面もあった。それは、生物個体の運動も個体間・個体環境間の運動もそれが“物質運動の形の一つ”であると言う認識であった。この認識は生まれたが、生物学全般にわたって透徹したものではなかった。この認識に巨大な一歩を進めたのは、A. I. オパーリンであった。彼は、「生命」の本質を探るため、その起原にまで遡り、その発展・変化を生化学的手法を使って解明したのである。これによって、生物個体の生命維持機構が解明されたのである。ただこの生化学的追究では、生物を生化学的特質に従って発達段階的に大きく分類することしかできず、生物の形態的分類である門間・綱間・目間・属間・科間・種間の生物個体の運動的特性の差異については、説明は及んでいないのである。また、生化学的側面からの追究であるから、運動のもう一つの側面である物理学的運動の追究は含まれていない。このように、オパーリンの行なった仕事は、このように生物を物質の運動形態の一つとして捉えたものの、それは生化学的側面からしか見ていないし対象も生化学的に分類できる大分類でしか分類していない。更に、個体についてしか言っていないで集団については述べられていない。

このような空白を満たすものとして、“古生物学”が発達して来た。現存の生物についての生物分類学は19Cに発達して来た学問であるが、「生命の起原」と関連させそれを古代にまで遡って見てみようとするのが古生物学で、生物分類学とはまた違った観点から生物をみることになった。この追究によって、生物全般の発展の状況がよく分かるようになったが、実は発展ばかりでなく隆昌・衰退・死滅のありさまも分って来たのである。特に、人間に近い脊椎動物の発展・盛衰・死滅の状況がよく分かるようになった。身体の骨格・表皮・心臓の形・体温等自己保存に関する能力、目・鼻・耳・歯・爪・四肢・筋肉・頭脳等食料捕獲・外敵闘争・逃避等に際しての上記諸機

関の機能の発達がよく分かるようになった。また、個体間・個体環境間の科学として“生態学”が発達して来た。これは、はじめ外界からの食物獲得、一生物を他生物が食べる食物連鎖の学問から出発し、棲所の獲得や縄張り（領域）の問題、集団のあり方の問題に及んでいる。

ただ、これらの個体の追究、個体間・個体環境間の追究の学問は二つとも、その個体が活動しまきおこす運動については述べていない。或る運動体の運動が始動となってまわりの運動体または物をまき込んで新たな運動体になるのであるが、このことを理解するために例を挙げるなら、物理学的な現象についての“土石流”が適当であろう。土石流は、水と泥と石の混った急激な一塊りの流れであるが、これは水の流れでもないし泥の流れ・石の流れでもなく、それら個々の流れとは全く別の流れである。各々を別に考えてははその運動の性質は掴めない。それらがミックスして流れる姿そのものにおの破壊的な特質が潜んでいる。そして、その主因となるのは水である。泥や石は主体である水に対して環境であったと言えるであろう。このように、主因は水だったが、この水が環境（水の外界）であった泥・石をその運動の中にとり込み、新たな運動体“土石流”を造って周囲に単なる水の流れ・泥の沁り・石の転がりとは違った作用の仕方強烈に働きかけるのである。もし、この土石流の運動範囲に人間または人間の構築物・所有物・生活関連物があれば、それらはいたく傷つけられるか破壊され、時には自身も土石流に飲み込まれて土石流の一構成素にもなりかねないのである。土石流で家が流れて橋を壊したなどと言うのはこの例である。鉄砲水などと言っていた言い方より、土石流と言う言いの方が、余程本質を把握した認識の深まった言い方と考えられる。この土石流の起り方と同じく、或る生物が世に出ると環境をとり入れ、その生物主体と環境とが一つになった新たな運動が展開する*。生態学は実はこの主体が惹き起こす新たな物質運動について調べる学でなければならぬのではないか。そして、個体学も、上のような意味あいの運動の主体となるものの学、それが新しい物質の流れをつくり出す能力についての身体の特徴を調べる学と言う風に整序し直される必要も一面ではあるのではないか。このように主張するのは、次に述べる人類が生まれたために地球上の物質運動がどう変わったか、また歴史的に原始時代から現代まで文明・文化を発展させて来た人間とはどう言う生物であるか、また生物を超えたものであるかを科学的に追究するのに不可欠と考えたからである。

*実は人間もそれが生まれたために、他の生物環境に大きく影響を及ぼし、全体の物質運動の姿を前とは

全く変えてしまったのである。特に歴史時代に入って人間が文明化するに従い、或る集団は大いに進歩し他の集団はとり残された。そして進んだ集団は自然の諸力・環境を我が支配下においたばかりでなく、他のおくれた集団をもその支配下においたのである。

生物の追究は、個体の研究にしろ集団や対環境の研究にしろ、生物自体の、または生物の巻き起こす物質運動の法則の追究が主眼であるが、これを人間を知るためのベースの知識としても利用しようとするのは、一般には当然のことであろう。前述した私の生態学に対する要求も、“人間はどんな生物か”を考えるために提出したものであるが、学問の世界では人間に最も近い生物を研究するものとして“猿学”が発達して来た。この学に対し、生存競争に遅れた分岐で人間研究の資料に値しないと言う批判もあるが、手・足・目・歯・口・頭脳等の身体的特質、情報通信・学習・群れづくり・子育て・防禦・巣づくり・棲む場所とその移動等人間にとって有益な多くの知識を与えてくれたことも確かである。また、人間それ自体を研究するものとして、その運動の発現起点である脳についての研究が深まった。特に、大脳の研究が深まり、記憶・言語（左側頭葉）、体制知覚（頂頭葉）、思考・意志（前頭葉）、運動司掌（前頭葉）等の諸機能分野も分つて来たし、断面的な機能連関も分つて来た。また、これら的大脑が発育中いつ完成され訓練はいつか適期か等も分つて来た。これらによって人間がどう外界に働きかけうるものかがより一層明確になって来たのである。

*羽仁五郎（講演等で言明）

しかし、これらは人間活動そのものを扱っているわけではない。猿類の中に、我々の行動の祖型を見出すことはあっても、それは我々人間の行動そのものを追究しているのではないし、大脳の研究をするにしてもそれは人間の具体的な動きそれ自体を研究しているわけではない。人間の行動に発源的作用を与える機関の構造について調べているのである。しかも、原理的な面の追究で、具体的に細かい複雑なことに關係する追究は行われていない。では、それはどこで扱っているのか。現在、それらを扱うように見えるのは社会科学である。

ii) 生物科学（生命科学）と社会科学（人間生活関係科学）

社会科学は、非常に広い範囲を扱っており、また方法も多岐に分かれていてお互が専門に分化しているので、学問の種類も多い。政治学・法律学・経済学・社会学・宗教学等がこの中に入るが、夫々の中がまた考え方や方法で大きく分れている。これらの間は遠く疎隔し、お互い間に理解が行っていないことも起っている。この生

れ方は、はじめ神学から法律学が発達し、その中から政治学や法律学・経済学（社会経済学）などが生まれ、更にそれから経済学や社会学が生まれて来た。心理学や人類学も生まれた。最近は行動学と言うのも生まれた。考古学や歴史学は古くからあったが、社会の歴史学になったのはそう古いことではない。これらは分野別に上のようになっているばかりでなく、方法論的に違ったりしていて上記の分野の中で更に細分されている。特に際立った対立は、マルクス主義と非マルクス主義のそれである。従って、この方面の研究（諸社会諸科学）を進めるには、“マルクス主義”とは何なのか、を明らかにせねばならないであろう。

これら、社会諸科学と呼ばれる学問は、皆人間の社会を対象にして研究している。しかし、社会と言っても夫々が異なった側面を対象としており、夫々に専門分化している。この事態をよりつつこんで見ると、面白いことが分かる。それは、生物学と比較して見るとよりはっきりする。生物学は、元々生物・鉱物等の記載の学である“博物学”から始まって、やがて独立分離して“生物学”になった。これは対象により“動物学”と“植物学”になった。この記載の学は顕微鏡の発明・利用などもあり“解剖学”に進み、一方血液循環原理の発見等により“生理学”も始まった。また、“発生学”や“遺伝学”“進化学”も生まれた。生物の分類に関しても研究が進み、“分類学”が成立した。そして19C末、生理学の中から“生化学”が生まれ、20Cになり、この中から生命に関する学問“生命論”が生まれ、また、19Cから今日にかけて“古生物学”が発達して来て生命論の発達に影響を与え逆にも与えられたりしているが、一方同時期に、“微生物学”や“生態学”なども生まれ、相互影響を与えている。今、これらを整理して見ると、I対象とする生物の種類による分類：動物学・植物学・微生物学、II扱う現象による分類：分類学・解剖学・発生学・細胞学・組織学・生理学・生化学・遺伝学・生態学・生物地理学・古生物学・進化学、III部分科学または応用科学として特殊分類できるもの：人類学・医学・農学、とすることになるが、私はこれに、IV生物すべてが持っている“生命”に関する学で上記の諸学のあらゆるものに基礎的な知識を与えるもの：生命論、を付け加えたい。これにならって社会諸科学を分類して見ると、生物学と一致はしないのであるが、I対象とする社会の種類による分類：農村社会学・都市社会学・原始社会論（社会人類学）・家族社会学・村落社会学・産業社会論、II扱う現象による分類：政治学・法律学・経済学・社会学・宗教学・歴史学・人類学・考古学、III応用して現実的解決に緒口を見つづけるのに資料・

知識を与えるものとして考えられるもの：経済学¹（資本主義論・帝国主義論）・国家論・社会主義論・金融論・教育学，IV社会科学に共通な基礎となる人間の把握をしているもの：人類発展史・人間生態学・生活科学，等となる。社会構成体論なども，IVの分類に入れるべきであろう。今，これを一覧にして示せば，次のようになるであろう。

*分類の規準のとり方によっては，IとIIの双方に入るものもある。

(生物学) (社会諸科学)

I. 対象にするもの(生物・社会)の種類による分類

動物学	農村社会学
植物学	都市社会学
微生物学	原始社会学論

(社会人類学)

	家族社会学
分類学	村落社会学
解剖学	産業社会学論

II. 扱う現象による分類

分類学	政治学
解剖学	法律学
発生学	経済学
細胞学	社会学
組織学	宗教学
生理学	歴史学
生化学	人類学
遺伝子学	考古学
生態学	
生物地理学	
古生物学	
進化学	

III. 部分科学または応用科学として特殊分類できるもの(生物)応用して現実的解釈に緒口を見つげるのに資料・知識を与えるもの(社会)

人類学	経済学
(自然人類学)	(資本主義論)
医学	(帝国主義論)
農学	国家論
	社会主義論
	金融論
	教育学

IV. 生物すべてが持っている“生命”に関する学で上記の諸学のあらゆるものに基礎的な知識を与えるもの(生物)，社会科学に共通な基礎となる人間の把握をしているもの(社会)

生命論

人類発展史

人間生態学

社会構成体論

生活科学

このように分けて見てなお審かにできないことは，社会とは何か，生活とは何か，社会と生活との関係はどうなっているのか，と言うことであろう。この社会と言う言葉については，従来多くの異った意味が付与されて使われてきた。社会学辞典(有斐閣)では，これを次の5つに分類している。

- 1)人間の結合，関係，生活の共同のように，一般的・抽象的な意味での社会
- 2)家族や国家も社会の一つであるという場合のように，広い意味での社会集団
- 3)日本の社会というように，一定の地域社会の全体
- 4)封建社会とか近代社会とかのように，特定の発展段階をなす社会体制
- 5)「社会の発見」という言葉の示すように，近代になって市民社会として意識されたもの

このように分類される意味について見ると，次のようなことが考えられる。上述の辞典からそれを拾って見よう。

上のうち1)については，社会学上，その本質を結合と見るか分離を含むか，有機体としてとらえるか，社会心または集団心を想定するか，社会関係ないし心的相互作用として把握するか，というような問題が生じ，形式社会学に見られるように，広義の現実の社会に対して社会化の形式としての純社会的な狭義の社会も考えられる。

2)に関しては，現実の共同生活体のすべてが社会と考えられるわけで，この故に，3)や4)のような用法も生ずるわけである。一般に「社会」と称するときは，集団に限定しないで，このような広い用法をさらに拡大し，1)との関連において，人間の共同生活のあらゆる側面を含む全体を意味すべきである。このような定義によって，「社会」とは，“人間の結合”・“結合されたものの形態”・“結合の形式や性格”等を指すのであると言うことがよく分かる。

iii) 人間の生活的結合

しかし，我々がここで分らなくなるのは，では「人間」とは何なのか，「結合」とは何なのか，と言うことである。これを考えて行くのに，アメリカ社会の例をあげよう。約400年前，アメリカ大陸に上陸した白人は，農耕・牧畜によって新しいアメリカ社会と文化とを築いて来た。後に工業が加わり，黒人も解放されて現在のアメリカの社

会となった。そしてそのアメリカ社会が造られている間、それより以前何万年にわたってアメリカ大陸に採取・狩猟・小園芸等を営み暮らして居たインディアン達の社会と文化は、或いは滅ぼされ或いは衰えさせられて行ったのである。こう叙述して見ると、「社会」とは何か、「人間」とは何か、「文化」とは何か、とすることがおぼろげながら分って来るようである。つまり、「社会」と言うものは生き物のようなものであり、形成され・発展し・他の社会と交渉（連繫・対立・攻撃・支配・吸収・消滅等の作用）し・内部構造を変化させ別の性質のものに変りながら生きて行くもの、と見ることができる。これをもっとくわしく見てみよう。

アメリカ大陸に上陸した白人達は、鉄製の斧を持っていてそれで原始林を伐り倒し、そこに畠をつくり農耕をして穀物を多量にとった。これは、それまでインディアン達の知らないものであり、行わないものであった。このことを行うのに、白人達は馬と犁を使ったが、これもインディアン達の知らないことであった。白人達は更に、ふだんの交通に馬を使い、防禦用に鉄製剣・鉄砲・馬・木造家屋を持っていた。種穀農業をする以外に、牛馬を連れて来て広い空地で飼った。彼等は道具を使うばかりでなく道具をつくりもした。その道具の源である鍛冶屋もいて鉄を鍛えて鉄製の道具をつくった。これらは皆、インディアン達が知らないものであった。これら、穀物にしても・畜産物にしても・道具のもとである木材や鉱物にしても、やがてその土地から得られるものとなり、それを加工し消費する一つのパターンが成立した。これをふつう我々は「生活」と呼ぶが、それらを行うために人々は“協力”乃至“共同”したのである。そして、インディアンの天然の狩猟場である森林が、白人達の農場・牧場に変えるために伐られ焼き払われ、湖に水を飲みに来る鹿が白人の鉄砲でうたれて減り、食料が不足したインディアン達が冬の飢えに耐えられず白人を襲った時、白人はがっしりした木造の家屋の中で鉄砲を持って防戦したのである。弓矢で武装したインディアンは、鉄砲の前には一たまりもなかった。白人は渡来者を増やし、その人達と“結合”してインディアンとの対抗をはかり、後には逆にインディアン討伐を企てるようになった。或る例では700余人のインディアン村(キャンプ地)を囲み、一斉にテントに火をつけて焼き殺した。逃げようとして出て来た者は、鉄製の鋭い剣で一刀のもとに切られたのである。老若男女を問わず、皆殺しにしたので、難をのがれ生きのびた人は数人も居なかったと言う*。この他、白人の持ち込んだ病気によってインディアンは大量に死んだが、前述のように食料採取地・狩猟地が荒されたり

とられたりしたための食料不足や、自分の居住地から追い上げられて環境が変わったことによる困難加重等のために、非常に多くのインディアンが死んでいったのである。このようにして、白人の社会は栄えるようになり、インディアンの社会はほろびて行った。この場合、アメリカ社会もインディアン社会も均しく人間が結合した社会であって、インディアン社会では人間が結合していなかったとは言えない。集団が大団団結せず、各集団の個体数は少なかったとは言え、人々は結合していたし、チャンとした組織を持っていた。人々は氏族に統合(類分け)され、その氏族がいくつが集って中間体の部族(これがない場合もある)に、そしてその部族が合わさって(2つが普通)種族に統合されていた。種族は言語(中の構成員のコミュニケーション(結合契機)手段の根幹)を共通にした一番基本になる集団で、更に同類の言語が通ずる種族が集まって連合体をつくっていた。これが、内に対しても外に対してもまとまりのある最大範囲の集団である。インディアンは、このようなまとまり方・集団のつくり方をしていたが、その支配地域は採取・狩猟と言う生活資料の獲得方法の性質上人口に対して広大なものを必要とした。イクロオイ(連合体)は人口2万で、略々現在のニューヨーク州全土を占めていたし、オジワワ(連合体)は人口2万数千で5湖の北岸を主にして沿岸を占めていた。このインディアン達の土地の占め方は、自分の占取地域に他の異分子が入って来ることを武力で遮るもので、現在の領土概念とは違うものの、やはり一つの“領土”の状態が一定期にはその居住地域に存在していたことになる。そしてその限界は、徒歩交通であったので、馬を交通通信手段に使っていた諸民族のように、広大な地域を占めることができず、こま切れ状態であった。インディアンの領土の状態はこのようであったが、この領土の概念を破って、白人達は彼等の領土の中に自分達の農耕地・牧畜地を建設して行ったことになる。しかし、何故このようなことが可能であったのか。

*レオヒューバーマン「アメリカ人民の歴史」岩波新書
これまで見て来たように「社会」は人間の「結合」ではあるが、単なる「結合」ではない。「白人の社会」が「インディアンの社会」に入って行った時は、インディアンの側から見ると「白人の社会」は「上石流」のようにも見える。「インディアンの社会」にぶつかり時にはこれをつき崩しバラバラにして、逆にその構成要素を自分の体内にとり入れて太って行く。白人は、自己の生物としての身体(あらゆる動きの源泉)・斧・犁・鋤・馬・種子・種牛等を持ち、それを運用する知識と技術を持ってインディアンの社会に入った。そして、まずその一角にとり

つくのである。長い拒否と交渉の末白人は上陸を許され農耕用の土地使用を許される。この“土地”は、それまで「インディアン社会」に在り、「インディアン社会」の構成要素の一つであったものである。この土地の上で前述のような自然→必要物→消費の循環が始まる。つまり、「生活」が成立し、「白人のアメリカ社会」が成立したのである。こう見て来ると、「インディアン社会」には、“人間”ばかりでなく“土地”も含まれていたことが分かる。また、「白人の社会」には、人ばかりでなく、斧や犁や鋤や栽培植物や牛羊がその構成要素として含まれていることが分かる。「白人社会」は更に多くの土地提供を「インディアン社会」に要求し、インディアン社会はこれを提供することによって自らの社会の生命を縮めたのである。この土地提供は、或時は武力で、或る時は金で、そして他の時は酒でなされたが、ノマディックなインディアンが何年目かに巡回する際に占拠し、犁や鋤・住居・村落を土地の上にタワダテ（鋤立て）し、その既成事実によって土地取上げを行なって来たのである。また時には、そこに居るのが邪魔であると言うことで、何千年平和に暮らして来たインディアンを何千キロの遠くに追い立てた*。もし、インディアンが無理に白人の居住地をどかさうとすれば戦争になるし、これはインディアンの負けになるのは明白であった。このように、いろいろな形で占拠された土地は、鋤立てされ、インディアンから見ると回復不可能な状態にされたのである。しかしこれは、白人から見ると、アメリカ社会の発展であった。

*チエロキーは平原東部からオクラホマに追われた。

iv) 人—物—土地の結合体としての社会

今見て来てはつきり分かるように、「社会」にはその“構成要素”として“人間”ばかりでなく、“土地”もまた“道具”も含まれており、更に“対象”も含まれているのである。実は、これらが“結びついたもの”が「社会」で、単に人間だけが結合したのものではないのである。ただ、この「人間の結合」と言う場合、辞典で言っている意味は、上にかかげた“生身の人間”ではなく、“人”と“道具”や“対象”時には“土地”が結合した「活動スタイルが或るパターンを持つか志向している活動体乃至活動潜在体」のことを言っているのではないかと考えられる。そうでない場合、上述のような“白人社会”は拡大発展するが、“インディアン社会”は縮少衰滅すると言うような事柄は、どうしても納得が行かないからである。白人とインディアンを較べた場合、生物的な人間は、少々の人種差や文化的訓練・知識等が異なるから能力や活動スタイル・その方向が異なるとは言え、その差は僅少であるのに比べて上述のように社会的には非常に異なってい

る。それは何故かと言え、上に述べた人と物が結合した形の社会的人間乃至文化的人間が基本的に相互に違っているからである。これはその後の両社会の展開の原因をかなりよく説明してくれる。また、「結合」と言っても、生物体として“生身の人間”が相互に連結できるのは極く限られた範囲のことで、多くは“道具”や“対象”や“土地”またはそれらの複合物によって連なるのである。これは、裸の協力の例として出される“綱引き”一つを例にとっても分ることで、“綱”は一つの人間の造り出した“手段”であり、裸ではないのである。相撲は裸に近いが、個人技であり、協力ができない。動物のそれに似ている。このように、“生物的な人間”“生身の人間”は相互に結合するのに限界がある。人間が結合するのは、社会的に生み出されたものを通じてであり、従って「結合」も人間が創り出して来たもの、生物の域を脱皮して新たに創ったものであると言うことができる。

以上述べたように、「社会」は「人間」が結合されて成立しているのだとすれば、この「人間」は“生物的人”と“物”とが結合した“或る方向を持った運動体”であると認識しなければならないであろう。“市民”などと言う言葉や“ブルジョア”と言う言葉などは、このような“或る方向性を持った人—物結合運動体”を意味する「人間」の類であると考えてよいであろう。「市民」は、それまでになかった生活スタイルをしており、考え方・行動の方向が独自のものを持っている。「ブルジョア」も「市民」とは割り方（分類規準）が違うにしても、生活のスタイルや外界の認識・行動規準等独特のものがあリ、「市民」の場合と同様に考えることができよう。この運動の独自性について、それがあるからこそ「ブルジョア」が成功するのであることを、マックスウェーバーは述べている。この「ブルジョア」と呼ばれるのは、上述したように人間が他の手段や対象や土地乃至それらを対象化して持っている金と結合した運動体で、国民国家とが一定域の経済社会の基底を形づくる一つの単位である。この“運動体”、私はこれを“人間活動体”または“生活経営体”と呼ぶことにするが、は前時代には見られないものであった。封建時代には、その基底になっているのは、百姓と呼ばれる農民であった。これは、その後の農民と違い、武士（領主）に隷属していた。“土地”は武士（領主）から貸し与えられ耕作をまかされていたものであり、自分の土地として勝手に売買できないものであった。そして収穫物は6：4か時には7：3の比率でまず武士（領主）の方にとられてしまったのである。その残りで百姓の家族は生命を維持し、労働力を生み出す再生産をし、ぎりぎりの生活を立てなければならなかった。それ故、

道具を改良し、馬等の動力を強化し、肥料をやって田畑を肥やす余裕がなかなか生まれなかった。しかし、この『武士（領主）の下に百姓』がいる生産生活形態が、武士（領主）が階層として打倒され消滅してから、『独立した農民の経営するもの』に変わったのである。この“独立した農民”は、誰からも土地の支配を受けず、金さえ払えばそれを買うことができたし、それまで禁止され不可能であった自分の儲けのために生産することができた。生産は農産物だけでなく、それを加工する織物等にも及んだが土地のみならず、生産のための原料・材料・道具の進歩したものの入手の自由、生産物の販売の自由、生産・販売のための交通の自由を要求するようになった。アメリカに渡った白人達は、このような『独立した農民』であり、比較的抵抗の少ないインディアンから土地を得て耕作・牧畜し、その生産物は自給以上のものは売った。売り先は南部のタバコのように本国のこともあったが、北部の小麦のように本国の生産物と競合して売り先のないものもあった。これらは、北東部に織物や皮革加工・木材加工・金属加工等の軽工業基地がつくられるようになってから、そこに供給されるようになったが、このような軽工業基地をつくることも促進したのである。『ブルジョアジー』とは、このような性質と性向を備えた“生産生活経営体”なのである。

v) 「人間」・「生活」・「生活科学」

「社会は人間の結合」とであると言う場合の『人間』とは、今述べて来たことでも分かるように、“生物的人”と“物”が結びついた運動体と言うことができるが、それは夫々の活動特性の側面により“生産的人”・狭義の“生活的人”・“社会的人”・“経済的人”等と分けて見ることもできよう。“生産的人”とは、外界を加工し自分の生活の中にとり入れるため、物（道具・手段）を装備した人（人間活動の側面）のことで、外界を加工し生活にとり入れる能力が問題となる。“生産的人”は、生産の場において、その生産にかかわる人と人のある種の結合を持つが、これが全体社会の結合に大きな意味を持つ。これは、労働の関係でもあるが、これを狭義の生産関係と言ってもよい。狭義の“生活的人”とは、消費生活のため物質を加工し・配分し・消費する装備システムと様式を持った人間（人間活動の側面）のことで、その消費内容の豊富さ・多様さ・質のよさが問題となるし、そのための装備やシステム・様式が問題となる。この消費の場合も、消費のための人と人との結合が生ずる。これを“生活関係”と言ってもよい。生産から消費にいたるとは、生産物を分配し運搬して消費するところまで持って行かなければならないが、このような行為を“流通”と言ひ、

これにも人間の関係がある。が、これは「経済学」では大分類では交換され価値実現される前の行為である故“生産”の中に入れられている。生活科学の場合、これを、最終消費行為の環境をつくる流れとして、つまり環境形成の一過程として生産と一括する方がよいと考えられるので、そのようにすることにする。

“社会的人”とは、上に述べたような人間の直接的な運動以外の、またその上にある、人と人のかかわりき反映して活動する人間のことを言う。この分類に入る人間は、この他、“文化的人”とか“経済的人”とか言う名で呼ぶことができるものもある。この“人”は、前述“社会的人”に含まれると見る見方もあるが、狭義の“社会的人”には含まれないと見た方がよいであろう。広い意味の“社会的人”を対象にその性質を追究する学問が「社会科学」で、狭い意味の“社会的人”を対象にその性質を追究する学問が「社会学」と言うこともできよう。また、“経済的人”を対象にその性質を追究する学問が「経済学」であり、“文化的人”を対象にその性質を追究する学問が「文化科学」または「人文科学」と見てもよいであろう。

このようなやり方で行けば、“生活的人”を対象にその性質を調べて行く学問があってもよいし、それを「生活科学」と言ってもよいであろう。但し、これは狭い意味の「生活科学」で、人間活動はすべて人間の生活なのであるから、その意味で「生活科学」と言う言葉を使う場合、人間がまさにおこす物質運動とかかわるものはすべて『生活科学』と言わねばならない。しかし、これは科学やその領域について考察するときに大切であるが、今「生活科学」と言った場合は、上記の狭い意味で考えて行った方がよいし、行かねばならぬ事情もある。このことをふまえて、「生活科学」とは、人間活動のうち、消費にかかわる人間活動の側面、それとつながる物質運動（物）の性質を調べると言うことになる。

「社会」と言う言葉に使われている「人間」と言う言葉の論議から、はからずも人間活動全般をさす『生活』の意味と、消費の活動をさす『生活』の意味と言う二つの意味があることが分って来た。そして、そのどちらにもそれにかかわる“人間の関係”が含まれていることも分った。この人間の関係の生産にかかわる面が“生産関係”であることも分った。が、もう一つ明らかになっていないのは、「社会」と『生活』との関係であろう。これをどう考えたらよいか。

これを解くには、「社会」とは何か、を考えて行かなければならない。「社会」とは、先述の定義によれば、本能的には「人間」の結合、集合を意味するのであり、具体

的にはその具体的なあらわれである国家や地方自治体・集落・家族・その他の集団・以上の地理的歴史的变化形態を指すようである。従って、「社会」と『生活』の関係を知るには、“人間”の結合と『生活』との関係を見ればよいことになる。前にも述べたように、「社会」の定義で言っている「人間」は、裸の生物的な人間ではなく、道具を持ち労働対象を或る関係で手に入れてそれに働きかけ生産¹しそれを販売し収入を得てそれによって生産と消費のための必要品を賄い、消費でも或る形の人間の組織を持ち消費用の道具を持って特有の仕方²で消費過程を行なって行くような、そしてそれらの過程をうまくやっ行って行くための知識と技術を持っている“活動体”を指している。このように、「社会」で言う「人間」は、人間を活動する人間として全体的に見ており、結合を予想させるあらゆるポイントで見ているのである。従って、この「人間」は単なる人間ではなく、「人間を含んだ人間がまきおこす運動体」³、より正確に言えば「人間がまきおこす物質運動体」なのである。体とは、物質の連りとかシステムと呼ばれるもので、その運動を担っている物質成分の連りと考えてよいであろう。

しかし、このような「物質運動体」を「社会」では何故「人間」と言っているのでしょうか。これを考えて見よう。この物質運動体の成分は、生産では人間₁-組織₁-道具₁-対象₁=(環境₁)であり、消費では人間₂-(組織₂)-用具₂-対象₂=(環境₂)である。組織₁は生産のための組織であり、対象₁は生産用の対象である。また、組織₂は消費用の組織であり、対象₂は消費用の組織である。はじめに書いた人間は、この連りの中では“主体”と言われ、この人間を主動力にしてこの運動体の運動が起こる。人間₁は組織₁を動かし、道具を使って対象₁の質料転換をはかる。組織₁にも人間₁が含まれているが、主体₁の主導で運動をする。この組織₁が人間₁つまり主体である場合もある。人間₂は、組織₂によって準備された消費物資・消費便宜を消費する。この場合も、人間₂と組織₂が重なる場合がある。自炊などはこの例である。このようであるから、人間₁も人間₂も、その活動を代表する。つまりその人間の名を呼べばその活動状態が分かりその特性が分かるようになる。従って、実際には、このような「物質運動体」が相互に寄り集って一つの活動集団をなすのであるが、人々はその「物質運動体」を動かしている人間に代表性を持たせ、それを「人間」と呼び、その「人間」にこの「物質運動体」を代理させ、意味させていると考えられるのである。

*生産だけでなく、流通や結合(政治)・文化(教育)

に携わる人もいるが、生産者で代表することとする。

vi) 「社会科学」と「生活科学」の違い

以上で、「社会」で言う「人間」の意味が分かったが、何故“人間”の結合”と云うような言い方をして、その“人間”の結合”の運動の状態を表立って言わないのが問題として残る。これは、“社会諸科学”では「人間」の結合・関係に関心があり、そこに注意が集中され、言葉も結合や関係と云う類のものが重視されるからと考えられる。しかし、そのため自ら使用している「人間」と云う言葉が“人間の活動体”であることに気づいていないようである。実は“生活科学”では、この活動と云うことが非常に大切で、これに照明を当てて行かねばならない。食・衣・住を考える場合、結局はこの物質の運動と云うところに行きつくのである。また、“社会諸科学”では人間関係に目が付いているから、他の人と関係なく行なわれる行為については関心が殆んどない。が、“生活科学”ではこれは追究の中心問題になる。例えば、食の栄養にしても衣のデザインにしても住に関する諸行為にしても、“社会諸科学”ではそれが“主体が独りでする”うちはとりあげられない。“主体以外がさせる”とか“全体の問題”となったとき、はじめてとりあげられる。ところが、“生活科学”ではこれははじめから中心の問題となっている。このように、“社会諸科学”と“生活科学”では、関心も具体化された対象も相互に異なるのである。ただ、元の根になるものは一つで、それは「人間の物質運動」と云うことであるが、“社会諸科学”では、「人間」の關係に力点が置かれ、“生活科学”では「物質運動」に力点が置かれていると云うべきであろう。ただ、“社会諸科学”も「社会」を「人間のまきおこす物質運動の相互關係」という眼で見ても行かないと、公害・交通・都市問題・住宅問題・居住(地)問題等に拮がった現代の社会問題を解くことができないであろう。つまり、両者は同じ物の側面の違いにすぎないと言える。そして、「人間活動全体」を言った『生活』は、両者の共通の基礎であると言うことができる。

これまで言ってきたことを図にすると次に示すようになるであろう。

以上で、“生活”とは、人間活動のことであり、“人間がまきおこす物質運動”であることが明らかにされたと思う。ここではこれを『生活』と表現することにしたが、これには生産と消費その他の過程が入っており、“生活科学”ではこのうち消費をとり扱う。これは“狭い意味の生活”で、これを『生活』と表記することにした。人間の生活過程にはこの生産と消費の外にもまだある。それは統合とか文化(教育)と呼ばれるものである。これらが一体になったものが社会つまり人間活動体の全体である。“生活科学”は、この全体の仕組みを認識した上で、

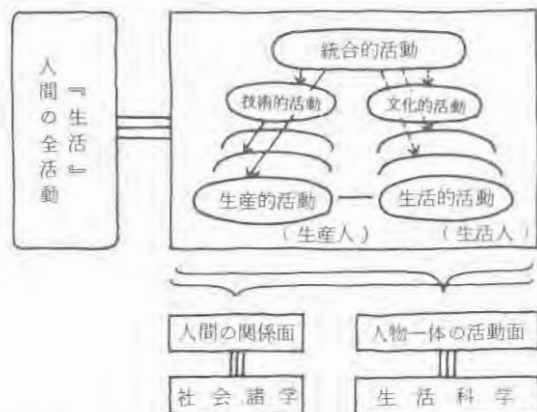


図-1 *統括：政治・行政・宗教・思想・信条・哲学

この狭い意味の「生活」を追求しなければならない。

2. 「物質運動」の性質

「生活」もその中の一つに数えられる「物質運動」はどんな性質を持っているのであろうか。そして、それはどんな形で「生活」の中に浸透しているのかを見てみたい。ただ、「生活」にだけある特別な性質については、3で述べることにする。

i) 段階がある

原子がいくつか集って分子をつくる。分子がいろいろな結合の仕方をして高分子をつくる。この高分子の中に生命のもとになったと考えられる物質が存在し、地球30数億年の前にそれらが生命へと発展する。

原子は、それより小さいものはないと考えられていたが、最近100年の物理学の発達によって、その中に更に陽子と電子・中性子から成っていることが明らかになり、更に近最近にこの陽子・中性子は中がいろいろの素粒子で成っていることが解明された。

生命は、環境から栄養をとる他家栄養の生物から始まり、その中から自家栄養の生物植物が生まれてきて、地球上の自然栄養の涸渇を補い、現在の太陽・植物→動物と言う栄養循環・エネルギー循環を完成した。現代の生物は大きく、微生物・植物・動物に分類されている。この動物は、身体を支える機構として外骨格のものと内骨格のものに分れるが、内骨格のものから脊索動物が生まれ、その中から脊椎動物が生まれた。脊椎動物は水棲の無類類・板皮類・軟骨魚類・硬骨魚類と陸棲の両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類へ分化して行った。哺乳類は、胎盤を持ったものと持たないものに分れるが、胎盤を持つ正獣類と言われるものは、更に食虫類・翼手類・鯨類・齧歯類・兔類・偶蹄類・奇蹄類・象類・食肉類・霊長類・

他に分かれる。この霊長類が更に猿類 (monkey) と猴類 (ape) に分け、後者がオランウータン・チンパンジー・ゴリラ・人に分かれ、人が古人・旧人・新人・現世人類に分かれたと考えられる。現在の人類は種としては一種であるが、身体的特徴によりその中がいくつかに分けられている。

これらを見てみると、誰でもが直ちに気がつくことであるが、これらが段階的に並べられていると言うことである。また、これらは「物質運動」の状態であることが分かるし、更にその物質運動に参加する物質の体制 (結合の状態) でもあることが分かる。言いかえるなら、夫々にその「物質運動体」特有の行き方・動き方があるし、それはそれを構成している物質及びその結びつき方から来ているのである。

更に、人間の段階にいたった哺乳動物の運動のし方を見て見よう。人間も、他の生物同様、外界に働きかけそれを体内にとり入れ、それを自らの身体に化し、それまでであった身体の部分を異質して体外に排出し、生命を維持する。が、他の動物と異なるところは、人間は手足を使って道具を使いやがて火を使い、更に生産をするようになったと言うことである。そしてその間、特有の“人の運り” “人の共同” を、つまり「社会」をつづつたのである。この「社会」とは、1でも述べたような、生産-消費にわたる人間の活動の全体のことを言い、「人物結合運動体」つまり「人間物質運動体」と見てよいであろう。これは、道具や生産が発展しなかった時期から発達した時代へと違ったものが生まれており、その特徴を一括して記すと次のようになると思われる。

I. 生産手段を、特定な人が、持たない

(1) 共同で獲物を取り、平等に分配する (原始共産制と言われる)

II. 生産手段を、特定な人が、持つ

(2) 農耕・牧畜社会で、特定の権力者が土地ばかりでなく、人も完全支配する体制を基本とする-生殺与脱の権 (古代奴隷制とか貴族制とか言われる)

(3) 特定の権力者が土地を支配するが人も直接支配する。但しその度合が弱く、身分制度等によって支配し、地代を貢納させるもの (中世封建制とか領主制・農奴制等と呼ばれる)

(4) 特定の有力者が、物質加工場を支配、土地・交通手段・通信機関等生産にかかわるあらゆるものを支配して生産を行ない、消費もそれに影響をうけて行なわれる体制 (現代資本主義とか資本主義と呼ばれる)

III. 生産手段を、特定な人が持たず、社会全体が持つ

(5) 乃至数集落または小地域でしかも原始的な生産手段の状態で成立する原始共産制と異なり、国民国家で成立するもので、生産と分配の平等体制。現在試験的にいくつかの国で行なわれている。論者によってはこの試みはうまく行っていないと言う論議もあるが、この行き方にもいろいろのものがあ、現在全部開発されつくしたとは言えないと言う主張もある（社会主義と言われている）

このような、人の社会の発展図式は、1'でも述べたように、人と物の結合した運動体の、その運動体を形成する物の供給、特に生産手段の供給を特定の人が制御することによってその人の個体（含家族）及びその制御機構を維持すると言う全体機構に光をあてて示して見たもので、物質代謝体としての社会の姿を示している。そして、段階毎に物質の結合のし方、部分及び全体の要求・行き方に特性があり、それがその社会の特色となっている。

このように、「物質運動体」は、無生物の段階から生物の段階、更に社会の段階まで、夫々段階（発展の段階のものもある）があり、その段階毎に運動の特性としての、また諸構成要素の内部的な結合に夫々の法則性があり、外部との連りつまり全体としての行き方にも一定の（法的）規則性があることが認められるのである。

ただ、注意しておきたいのは、素粒子・原子・分子位までは、その行動は殆んど決った一定方向の動き方をするが、高分子になるといろいろの方向に変化する。生物では、この高分子が組み合わさって体ができているが、この行動可能な多様性を如何に一定方向に向けるかと言うことが問題になる。この解決として、細胞段階では高分子の酵素が触媒として作用して上の目的を達成するようになっている。しかし、この物質運動が生物の個体の段階になると、その行動多様性は脳神経によって一定に制御されている。これが、人間社会のように、個体を越えた集り、人と物との結合物、更にそれらの集りになると、この運動体の部分及び全体の行動制御はただ単なる脳神経系だけの作用ではできない。社会の中に、頭脳に当たる作用体が必要で、この作用体が全体の中の各個・部分・及び全体に作用して、行動を或る方向にとらせるようにする。また、その社会の中の各個がそのように納得乃至条件反射してそうするように、各個の脳理解及情動の作用を利用して語りや宗教が、言いかえるならこれらは語り作用体や宗教作用体であるが、それらが成立する。語りは全体がどう動かなければならないかの基礎的な理解を行かせるためのもので、昔は専門に“語り部”などが居た。が、現在では国立の機関や民間の機関が諸学問と言う形でこれを行なっている。この中にはいろいろ

の流派があるが、権力把握者はその中から自分の活動に合ったものをすくってとる。全体から見るとそれはある偏りを示すとも言えよう。教科書問題なども、実はこのようなところに根ざしている。この面では、恣意でなく理性と科学性が望まれる所以である。宗教はこれに対し情動に訴えるやり方で、本論では広い意味で儀式・儀礼も含めることにする。宗教は、前述の理性の部分が増大すれば、縮小後退する性質を持っているが、なかなか全部なくなると言うわけに行かない。特に儀式や儀礼は新しい社会と言われる社会主義になっても形姿は変わったとしても残るのである。情動的起励作用体である。

以上述べたように、無生物・生物・人間社会（生活）は、これらを通じて共通の運動法則を持つと同時に夫々の段階の運動法則を持ち、夫々別な特性をも持つのである。特に、生物の自己保存と自己再生産のための機構、人間社会の個体を越えた自己保存と自己再生産の機構、一定方向の行動の発現形式及其の源泉等が分って来たが、それらに注目する必要がある。

ii) 段階毎に法則がある

物理的な現象は、素粒子は素粒子の、原子は原子の、分子は分子の、高分子は高分子の夫々特有な運動があり、その法則を究めることが科学であり、その中のいくつかを人間のために利用しようとして体系だてたのが技術であると考えられている。この段階は、上述したような大分類の中でも段階があり、この大分類を超えてつくられた運動体にも段階がある。前者の例としては、例えば水は雨水の水と川になった水・海の水とは運動状態が異なり、人間は大雨や洪水・津波等に常に心を配らねばならなくされているし、後者の例としては前にも述べたが水・土・砂・礫・木切れ等の混った急な流れである土石流が、川底を掘り岸を削り川のないところも川にし家をつぶし人や畜禽を粉々にする程の非常な破壊力を持っている等がある。

生物の段階では、それは無生物とは違った運動法則、「生命活動」を持っている。それは“外界を同化し異化して行く過程で自己を再組織して行くもの”でそれによって同型を保持して行くのであるが、これがあらゆる生物に共通に存在する。ただ、これは中が植物・動物にまたは微生物・植物・動物に分けられるが、これらは栄養のし方で独立栄養・従属栄養・混合栄養に三大別される。植物は主に独立栄養（自主栄養）形式をとっているが、中には寄生植物・食虫植物のように混合栄養のものもある。動物は従属栄養（完全動物性栄養）で、微生物は自主栄養・従属栄養・混合栄養三者のものが含まれている。

微生物は、生物を動物・植物の2大分類すればその中

に入れられるが、植物では菌・藻類が、動物には原生動物が入る。前者は夫々5門・9門で、後者は1亜界をなす。

*岩波生物学辞典 p.82, r

植物は、上述の門の外、コケ植物門・維管束植物門の2門があり、後者は更にシダ植物・裸子植物・被子植物の3亜門に分類される。これら分類されたものは、夫々特有の運動方式がある。被子植物は双子葉と単子葉の2綱に分けられ、それより下は我々が知っているブナ・バラ・ウリ・イネ・ネギ・ラン等の植物を含む目に分類され、更にその下は科・属・種に分類されている。これらの植物は、分類の段階毎に特有の性質を持っている。

動物は、前述した原生動物以外に後生動物があり、2亜界になっている。原生動物はこれも一つの門となる。後生動物亜界は、中生動物・側生動物・真正後生動物に分けられるが、前者には中生動物門・中者には海綿動物門・後者には腔腸動物門から脊椎動物門までの14門、分類のし方によっては29門が含まれている。これらの門は、夫々特有の形態・運動をする生物体の集合で、その中が更に綱・目・科・属・種と細分されている。これらの分類が形態ばかりでなく(運動の)性質の分類にもなっているが、このことの例をあげよう。脊椎動物(門)は魚類と四脚類の2上綱に大別されるが、前者は更に無顎類・板皮類・軟骨魚類・硬骨魚類の4綱に分類され、後者は両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類の4綱に分類される。この軟骨魚類(サメの仲間)には、サメ目とエイ目があるが、サメは身体が魚型で丸く細長く、口は下につき横に割れており、鋭い歯がついていて行動迅速且つ凶暴で、あたりの魚を襲って捕食するが、エイは身体が平たく尾が退化し、四角いタコのような形をしていて、海底をうように泳いだりして、物をかみ砕く強い歯で海底のかたい生物を捕食したりしている。このように、環境に適應するような形に形態や活動形態が変化し、一つの特徴のある運動形態を形づくっている。

陸性脊椎動物は、I'でも述べたように、両性類から爬虫類が生まれ、爬虫類から哺乳類と鳥類が生まれたが、これらは夫々特有の体制ばかりでなく運動形態をも持ち合わせている。前にも書いたように、両生類は皮膚を常に水で濡らしていないと呼吸ができず、水辺を離れられない。それも淡水である。それから、この方がより根本的なのであるが、卵を水の中に産まないとならない。この点、両生類は魚類と同じ仲間であり、無羊膜類に属する。従って、両生類は水辺を遠く離れるわけに行かないのである。しかし、その中から羊膜を持ち殻を持った卵を産むものがあらわれ、これらが爬虫類になった。皮膚

も乾かないかたいものになり、肺も発達したので、水のない奥地にも棲めるようになり、爬虫類は陸地の相当の部分に拡がったし、海に入る種類もあらわれ、更に空を飛ぶものさえあらわれて、地球表面を広くおおうようになったのである。身体の体制も、頭骨や歯も変化し、鋭い何本もの歯は獲物を捕えるのに便であるとともに競争者や敵との争闘にも強く、行動も敏速になったので、両生類の中で歯がありがちりした体格の持主であったラキトム類等をも駆逐し、生態的にその後がまに坐るなどのことができたのである。

哺乳類についても、心臓の発達と体表毛による体温の恒温化の獲得、卵ではなく仔を産み乳で育てることの獲得、特に有胎盤類は長くお腹に入れていた仔を大きくしてから外部に出し育てられるようになった。爬虫類が減じたことについては諸説があるが、地球が生物にとって困難な環境になっていたことは推測できる。この困難を、哺乳類は恒温・敏捷性・目耳の情報キャッチ力・小型等の特性で乗り切り、外界も被子植物相に変わった環境の中でも生き残り、更に諸種の環境の中に適応放散して行って、現在にいたるまでの繁栄をなしたのである。これは、一番に運動体としての哺乳類の体制が、爬虫類よりも環境適応力が優れていたからと言えよう。

この哺乳類の中から霊長類が生まれた。が、彼等は木の上に登り、鳥種ではないが地上の動物にくらべるとはるかに自由に、水平ばかりか上下方向にも移動することが可能になり、物を見る範囲が広くしかも平行視による測距が可能になり、敵の発見・獲物の発見に便利になった。手を使って木の枝を掴むので、手が発達し対向指として使うことが可能になり、集団行動と声の合図は口を発達させて、遂には人類の言葉を生んだのである。

人類は霊長類から出発したが、樹から下り、手を更に発達させた。と言うことは後肢を足として分離させ、直立歩行ができるようになった。歩くことから解放させられた手は、木や石を道具として使い、更にこれらをつくり出すようになった。このためには、工作道具が必要であるが、人類の祖先はそれを自然石の加工等で得た。こればかりでなく、火も発見し、発火方法も発明した。更に、引矢を造り使いはじめた。道具はいろいろのものがつくられたが、そのうち石を磨いてそれをつくった。更に、土をこねて火で焼けば土器ができることを発見し、やがて植物の栽培・動物の飼育をするようになり、道具も石や土器より進んだ軟かい金属青銅を発見し、造り出し加工して使うようになった。更に、それは鉄の発見・製鉄・加工の方法の発見につながり、人類の文明を飛躍的に高めることとなった。

文明時代に入った人類は、石器や土器ばかりでなく金属器をも使って、耕作や牧畜を拡大し、一定地域により大きな人口が住めるようにした。このような生産拡大は、人智のいたすところであるが、その生産指導者は生産物が以前より余計とれるようになり一人が一家族を養える限度を越すようになると、その余剰物を自分の手中におさめるようになった。これは治山治水の技術者のこともあるが、人々をまとめてそのような体制をつくった組織者のこともあった。後者は宗教的な指導者であることもあったが、前者の力を重ねそなえているものもあった。このような社会に属する個人は、その権力者に身も心も従わねばならず、権力者は人々の物ばかりでなくその身体までも、生殺与奪の権を握っていた。このような状態の社会を奴隷制と言うが、ギリシャ・ローマのみならず、上記の形そのままではないがいろいろな形でこれは多くの国で行なわれていたのである。人々には、常に人命の狩り出し・人力の狩り出し・生産物の供出があり、生産も上からの要求に合わせてやらねばならず、消費生活は食って抜かれるだけで他に目がまわらず、直接奴隷にされた人は人身を拘束されて家庭生活さえできなかったのである。支配者は、諸集団を統轄しているので、その人数・財力・生産力を記録せねばならなかったが、その方法がいろいろな形で発明され、それを書き読む者（官吏）もあらわれた。彼等は計算もした。農業のために暦がつくれ、この発布がまた権力維持の力になった。また、土地が洪水等で流されるところでは、土地の測り直しが行なわれ、測量が発達した。この暦と土地測量は数学の発達をうながしたのである。暦は天体を観測して割り出すもので、言わば天測と地測が数学の必要をよびさましたと言えよう。

*エジプト・アッシリア等古代中東諸文明地の国。インカ・メキシコ・古代中国等。古代日本も、形は異なるがこの類の社会であったと言われる。

この古代の体制は、奴隷獲得の為異民族支配・奴隷化、その為の戦争を生み出したが、内部で一部の権力者の肥大と奴隷の増大、一般の民衆の没落・生活困難をまねき、社会不安がつって外患も加わり崩壊する例が多かった。

次に生まれるのが、直接生産者が人身隷属ではない形の隷属をする封建制で、ここでは直接奴隷の形の被支配者はいず、人々は土地を領主から貸し与えられ、それを耕作することによって収穫物を自らの生活にとり入れることができるようになった。但し、土地借りの代償として領主の要求する日に要求される日数だけ領主の畑を耕さなければならない。後に、この労働地代と言われるものは現物を年貢として納める現物地代に変わり、更にお金

で納める貨幣地代に変わった。この最後の段階では、百姓と言われた直接生産者は生産物を売ることを目的に耕作してもよいことになる。つまり、金を儲けるために物を作って売るのである。まさに、資本主義的经营と言ってもよいであろう。日本では、この最後の段階は殆んどと言ってよい位見られなかった。人々はこのような体制の中で、細々とではあるが、家族を持ち家庭生活を営むことができた。ただ、米を売った金で商人から物を買って生活を豊かにすると言うわけに行かなかったので、生活は自給自足的なものであった。人手のかかる住宅も、ムラの中の共同でつくられた。食物は、栄養は少ないだけでなく、ばっかり食になり、偏ったものになった。衣も粗末なものであり、日本の場合娘がカタビラ一枚で何年も過したと言う記録もある。ただ、材料が麻などで強かったから、何年もいや何代も着られるものもあった。フトンなども、各人に上下が行きわたるわけがなく、一つのフトンに多勢が寝たが、フトンがなく、ワラフトン、処によってはワラやムシロがフトンであった。住も、土間に寝起きするのが一般であつたらしく、日本の場合鎌倉・室町時代にはそれがかなりあったことが絵巻物等で分るし、江戸時代には大分少なくなったとは言えそれはあったと考えられる。更に明治以後最近まで、土の上に寝る土座生活があったことが経験者や話をしてくれる人があって分かるし、山間部や平地でもおくれた地方では実見できるものもあったので、実際には一般にかなりあったことが推測される。封建時代の住宅は広さも土間と床上一間の家が多いらしく、床上二間、または初期それにもう一つついたヒロマ・ザシキ・オンドの形式のものは、江戸時代になって行きわたって行ったようである。しかし、小さい住居しか持てない家は多かったのである。ただ、支配者は農村の中に落ち込み者が出、その人達が逃散することをおそれて、常にムラの中が平らかに行くよう配慮した。そのため、ムラの中はそう大きな凸凹ができず、大体同じ位の家が並ぶ村落が見られた。人によっては、同様のものを封建的類同等と表現しているようである。

封建制度が倒れて資本主義の時代になるが、この主義の下では、農家はすでに百姓でなくなり自営の農業企業家となる。自分の好きなものを好きなだけつくり、入った収入は自分の自由に使う。工業や商業に志した人も同じで、好きなものを好きなようにつくり商売してよい。通商や物資交流の妨げになる関門、関所のようなものは廃止され、売買が自由になる。生産に対して、これをつくれ・あれはつくるな等の命令や制肘はうけない。こうして、商工業・農業は自由に運営される。日本では、幕

末・明治初期新たに発生した村内地主に対する現物地代貢納の地主制度が残っており、金を持っている消費市場が発達しておらず、社会意識も封建制度の時代の身分観や分際観が濃厚に残っていたので、雑草のような資本主義の発展はなかった。製造業も官営の払い下げが多く、それを手にした人は独占化する傾向にあり、狭い日本の消費市場を更に狭くする傾向にあった。後、これらの資本が、海外にその市場を求めて出て行った時、人々はその資本が海外で動きよい内生産基盤を固める働き蜂になることを強制され、農村はそのための労働的・食糧的基地化され、またその海外権益を守るための軍隊の人的要素の供出場と化したのである。従って、人々の消費生活は資本主義国ではいろいろの屈曲がありながら向上したのに対して、我国では封建制度の頃よりそう向上しなかったのである。日本に本当の資本主義の時代が訪れるのは戦後で、前記独占的資本つまり財閥は解体され、農地を握る地主制は廃止されたので、諸都市が広汎に爆撃されて敗戦したと言う環境の中で、中小零細の企業がゾクゾク生まれて競争した。滅びたりまた生まれたり、幾多の変遷はあったが、二重構造もよく克服して、日本は生産を前に進め、労働者もその割り分をとり、全体として所得増大をかせいだのである。そして、人々の消費生活は、はじめて向上の方向を向いた。食は改善され、アメリカから里帰りした友人が驚く程よくなったし、衣は食よりも早くまっ先によくになり、世界に伍して恥づかしくないだけになった。しかし、住だけは土地問題もあり、そのような飛躍を見ることができず、世界から“うさぎ小屋”と言われ、趣味や余裕もなく働くので「働き気遣い」と言われたりしたのである。つまり、日本も他の先進資本主義の国が歩んだ道を、数分の一の時間で一瀟千里に走ったと言うわけである。今後どうなるのか。日本にはこれまでにない、新しい貧困が生まれている。都市の人は、体力的にも15年前のそれより5年若がえっていると文部省の調査では言っているが、その一方で危険な道路により外にも出られず、狭い家で動きもならず、肥満に苦しんでいる大人や子供がいるし、家庭的な雰囲気につつまれる時間がますます少なくなりつつある。その他、受験地獄・就職難・差別・老後の保障等ももろの問題があり、人間が人間らしい生活を送っているとは思えない。その中で、住宅や地域・都市等環境の問題は大きい。人々の生活は、一番基本的な太陽・空気・水・緑等に十分接しられるようになっていないし、更に運動や休息のための空間(必要空間)・文化のための施設や空間それに到達する交通が整っているとは言えない。これを、どうして行くかが、一番の問題であろう。

以上述べて来たように、歴史の各段階で、成立可能な生活が或る形をとるようになっていく。その社会の人や物の結合形態や運動形態が決まっており、その下で、つまり、各段階で特有な結合運動の法則があり、可能生活の法則があると考えられるのである。

iii) 生命と生活・環境

これは、前々節の“段階”のところに入れられるべき内容であるが、“生命”と“生活”とは物質運動発展の一つの線の上の違った段階のものとして見ることができる。この見方によって、“生活”と言うものがより明白になるのである。

“生活”は“生命”とは異なる。英語では両者とも同じlifeという言葉で呼ばれているが、前者は体内的な物質運動の総体を言っているし、後者は体外的な物質運動の部分像または全体像を言っている。後者は、例えば“食べて行く”も“生活”だし、“生きて行く”も“生活”なのである。“食べて行く”は物質運動の部分像を描いているし、“生きて行く”は全体像を描いていると見ることができる。

“生活”は、では“生命”とどう異なりどう関わっているのかを見ると、“生命”は“生命体の物質運動像”、つまり身体の自己再生産活動の像であるのに対し、“生活”はこの身体の再生産をなさしめるために外界からそれに必要な物質をとり集め・身体に入れてやり・身体から異化されたものを排出してやる全過程を言う。物をとらえ身体に入れてやるについては、それを単に個体の身体が行なうものと、組織だった集団の力でこれを行なうものがある。後者は、食肉動物に見られる自然の姿から、更に道具を持ち言葉を以て集団化し・火を知ってそれで調理し、体内によりとり入れ易いものにしてとり入れるものまで、発達段階がいろいろある。

このように、“生活”は外界から物質をとって来て“生命体”に入れてやる活動で、これは単独であろうと個体の協力であろうと、また歯や爪・脚力等自身の体の力にだけ頼ると、道具や火等自身の力以外の物理的・化学的力を利用しようと、それは問わない。人間の活動なら何でもよいわけである。今、食物を体内に入れる・異化されたものを体外に出すことだけを言って来たがその他、生命維持上自分を捕食しにやってくる外敵からは速やかに逃げなければならないし、時には争闘もしなければならない。食物に対する競争相手に対しても同様なことが言える。これらの活動は皆“生活”に入る。“ねぐら”を探すのも、“生活”に入るし、食物探しやねぐら探し等のことも何もしないで“遊ん”だり“移動”したり“眠っ”たりするのも皆“生活”に入るのである。

こう見て来ると、“生活”とは“生命体”が活動して、外界の物質を使い・何らかの行為をすることで、これらを総称して私は“生命体と外界の物質との結合した物質運動”と呼んでいる。このように考えると、後に述べる“環境”や“生活型の適応放散”等の説明がうまくつき、生活への理解がより深くなり、現実の問題をより実際に合致した方向で解決できるのである。

ちなみに、“環境”について述べておこう。

“生命体”は外界からその生命維持・生活維持に必要な物質を持ち去るが、そのような物質を持ち去られた外界は、それを外界自身の内部的な力で補填するものもある。これは時間の函数であるが、このようなことの可能な外界は、その生命体に対する常なる物質供給体になりうる。このように、恒常的に必要物質を自己生産して“生命体”に与え続けられる装置になった外界を、私は、“環境”と呼ぶのである。破壊環境とは、この循環がこわれたものを言う。環境不成立と言うものもある。

iv) 生活の型と適応放散

前節で生物の物質運動の形態が“生命”の形から“生活”の形まであることを示したが、この“生活”には、“生命”つまり生物に見られる門・綱・目・科・属・種と細分されて認められる類同性と同様のものが認められないであろうか。

実は、私はこれは現実存在しているものと考えている。それは、生物及び人間に生活様式と言って一定の生活の方式が定立している場合が多いということからも認められるし、行動を起こす源である生物及び人間の頭脳が先天的並びに後天的に獲得した行動様式を保守しようとする性質を持っていることにもこれが認められる。特に人間の頭脳は学習可能な範囲が広がっているが、それが必ずしも可變的にしかも理性的な方向にのみ行動を向け得るものではないことを示している。つまり、長年にわたって適応して来た行動様式は、理屈には合致する短期的・試験的な試みにはなかなか移行できないのである。これには何かわけがあるに違いない。新しい科学的な路線などと言われるものが、なかなか民衆の中に浸透しないとか、浸透はしたががえって生活の本質である“生活のうまみ”を奪ってしまったとかのことが起り易いのも、このことによると考えられる。

これは、考えて見れば“生活”と言うものがそうたやすく分かるような代物でなく、一面的な科学路線・近代主義的科学論では捉え切れない難しい対象であることを示唆している。頭脳の研究も奥が深く難しい学問であるが、“生活”はその頭脳が身体とともに動いてつくる物質運動の像であるから、尚更難しいものであると考えるこ

ともできる。新しい機械を組み立てたり、化学で新しい物質を合成して生み出す、このことも勿論難しい仕事ではないが、新しい“生活”を生み出すのは実はこれより別な難しさがある。近代的な科学路線で考えてはうまく行かないのである。これは、生命が発展して新しい型が生まれて来ると似ている。C.ダーウィンはこれを、生物の体制・能力の多方向への変位と、相互の生存のための闘争、適者が死滅から生き残って現在の“種”を形成したと主張することによって説明した。ソヴィエトのミチューリン・ルイセンコ達は、この変位に或る内的な方向性のある力が働くことと主張したようであるが、それらの主張は程なくすたれ、最近では遺伝子の発見、その変質に対する頑健性が主張されている。これらの利用では、むしろ人為的に遺伝子の部分を交換して別な行動をする生物体をつくりあげ、人間に利用しようとしている。

ともあれ、“生命”体は環境への適者生存でつまり長い間の変化、その中の多くの死滅の後に環境に適した体制・行動様式をとったものが生き残って現在の形になって来ている。一つの原の型からいろいろの型が分れて出て、その中の環境に適したいくつか生き残ることを生物学では“適応放散”と言っている。これを図で示せば次のようになるであろう。原型から出発したいろいろの方向に変位した種は、更に枝分かれして違う体制になり、お互近しいものはいろいろの意味で生存競争し、その中の環境適者が生き残る。死滅するものも多い。

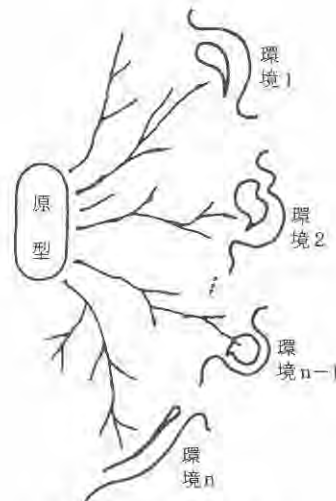


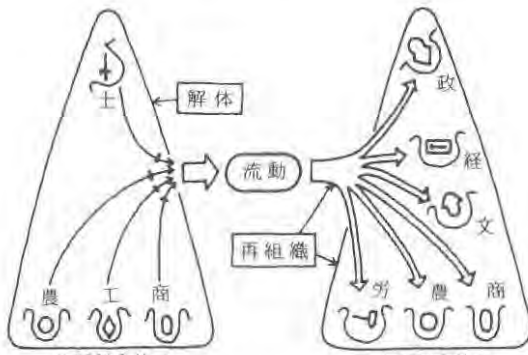
図-2 適応放散型

実は、“生活”体にもこのような体制・活動様式の型があると見られる。そしてそれは生きる要因とその条件とにより、上記の“生命”体とは大分見かけの様子は異な

るが、物質の組み合わせ・その運動につき一定の形態・型があり、それが主体の条件と客体の条件のかみ合せて存在可能になるようになっていゝる等、より深く物質運動として見るならば“生命”と同様なものが見られるのである。私は、この内外の一定の条件の下一定の型をとる生活を“生活の種”と呼び、一定の環境条件の下でいろいろに分化し或る定まった生活型へ生活が“種化”して定着することを“生活の適応放散”と呼びたい。これは、夫々の歴史時代、社会状態において内部に夫々いろいろの一定のものが見られるもので、例えば江戸時代には“侍の生活”と“百姓の生活”の型があり、更に「町人の生活」があったと考えられる。明治以後の諸階層は「農家」「町家、だけでなく、新しく生まれた“官員さま”を中心とした「生活種」「職工」を中心とした「生活種」があり、これらはいろいろの体制・動きが異なっていた。また、江戸時代の「百姓」と明治以降の「農家」では生活内容はそう変らないとしても、規制条件・供給条件等が大いに異なっており、更に地主的制約を外すなら大きく変わ

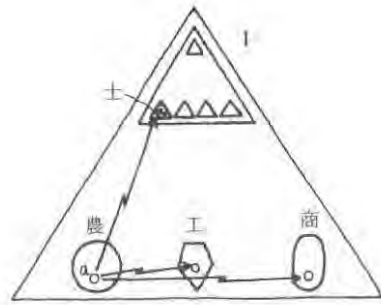
りうる可能性を持っていたと言うことで、異っていたと見ることができる。

ここで、一つ注意しておきたいことは“生命”と“生活”の違いについてである。それは前にも述べたように物質運動の体内過程と体外過程の差であるが、実はこのために大変な違いが生まれてしまうのである。“生命体”は或る物質の結合状態のことであり、“生命”とはその結合体の特有な運動代謝の状態を含めた全体の姿について言っている。もし、この結合物の一部でも欠損があったり、更にそこに他の物の入れ替えがなされているとか、そこが変形したままになっているとすれば、それは生きて行けなくなるか、環境に合致して生き残ったりする。この生き残る場合は、それが常に同じ型を生み出すように定着しているとすれば、それはすでに“別な種”になっていると言うことになる。つまり、“種”が変化するときには、それは個体的にも滅びることを意味する。が、“生活”の場合、Iの状態のAの体制をしていた生活型が個体aを含んでいるとき、状態がIIに変わることによって生活



生活総合体 I 生活総合体 II
前の生活型（生活総合体 I 内の生活諸型）全部に次の生活総合体 II の中のどの生活の型にもなり得る可能性がある。∩：“生活の種”の記号

図-3 階級変化と身分解体・職別分業



農→士のみでなく、農→工、農→商等の身分変化のあった人もかなり多い。

図-5 身分の移動

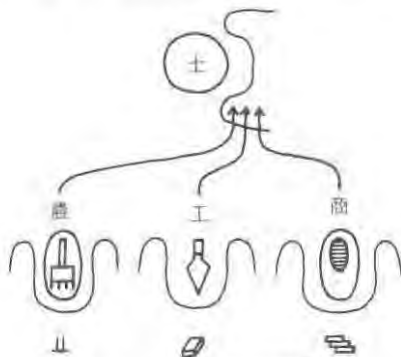
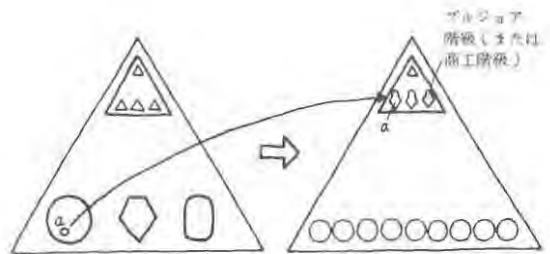


図-4 身分と搾取の関係
∩：環境の記号



被支配の生活経営体から支配階級のそれになる図。放沢栄一は、百姓から資本主義社会の基礎階級である資本家になり、政治・社会を動かした。IのA(a)からIIのB(a)階級に移った例。

図-6 変動期における身分変化と社会構成変化

がAからA'に変ったり^{*)}、状態がIのままの場合でも個体a自身の力または外力によってAの生活型がBに変更^{**)}されたりした場合、“生活の種”はAからA'乃至Bに変わるにしても、その中に含まれる個体aは変わらず同じ人間がそのままAの中からA'の中へ、またはAの中からBの中へ生きのまま移るのである。つまり、“生活”にかかわる個体は“生命”にかかわる個体と違い、型が違った時でも生物的“生命”は維持されるのである。この点が非常に重要であろう。

*1 徳川政権が倒れて土支配の時代(I)が終り、明治の時代(II)が来、百姓(A)が自由な活動が行なえる農家(A')になるなどはこの例。この場合、百姓個体(a)は変わらずAからA'の中に移行する。

*2 封建制度(I)の下でも、農業(A)をしていたものが学者(B)を志し、勉強して学者(B)になるなどこの例。村田蔵六は百姓から医者に、次に蘭方医になったが、更に技術的な維新の戦術家・行政家・政治家になって行った。この場合、生活状態はA→B→Cと変って行ったが、彼の個体は変らなかった。

“生活”はこれらによって見ると、“人”の活動力によって物が集められ、或る方向に運動を始めると言う形で形成されるものであり、次にはそれは解体されて次の使用を待つ。このために不使用期間中“再整備”が行なわれる。実はこれも、“生活”の一部なのである。掃除・洗濯・修理などはこのことを示している。次の使用を考えないならこのようなことは行なわなくてもよい筈である。機械や器具についても、このようなことが行なわれている。その場で使ってあとは顧みないものは、“使い捨て”と言って“再生”されないで捨てられる。この、物質集積→生活形成→解体→再整備→新物質も加えて再集積……は、“生活”が循環する図式で、“生命体”の中での物質循環にかなり似ている。ただ、“生命体”の中にある物質は、体内のどこかに留めおかれるので、再生過程・再使用時におかれているところ・使用されないで残っている時置かれるところが決まっているから、それらの物質は使う側から見ると、reserve(確保)^{**)}されていることになる。つまり、他の個体を使うことはできないし、盗んだり使用を妨害することもできない。次には必ず主体に使われるようになっていく。これを横どりする組織体は“寄生生物”とか“ファージ”と言われて若干存在するが、それは一般に主体の循環を根本的に壊してまで行なうのではなく、余りを横どりするようになっていく。中には、主体を殺してしまうものもあるが、その時は寄生者も滅びてしまう。そして、これらの作用体がつく形が主流でなく、主体は体内の再生産に必要な物質を確保

に確保し、再生産を完うすることの方が正常な姿であり、そのために“生物の種”が残って来たと考えられるのである。“生活”でも、この生活形成用物資・再生されて生活使用に準備されている物資は、その当の“生活主体”のために確保されている。そのための、人と人の組織があり、恒常的に生活必要物資が流れ込むようになっている。この確保のされ方には、社会の状態によって力の強さ・その姿に差があり、それによって形成された生活の姿が異って来るのである。

*3 空間の場合、確保・配分の行なわれる元になる力を空間支配力と言い、そのような力の行使を空間支配と言う。

3' 生活の性質

生活と言う言葉には、動物の生活等生物界の生命維持活動の意味もあるが、人間にかかわるところでは「生産」その他を含む人間活動全体を示す『生活』と、消費のための直接活動を示す『生活』の両方の意味がある。ここでは生物を含めた意味、人間にかかわる意味、それも『生活』と『生活』の双方の性質、構造と機能・意味等について見てみよう。

i) 生物の生活——主体と環境——代謝

生物は、或る環境から生命維持に必要な物質をとり入れて身体にとり入れ、それ以前の身体を構成していた成分を分解して体外に排出している過程を言っている。この過程で大きな特徴・問題に気付く。一つは、環境とは主体に対して物質供給体となしていると言うことである。次に、主体は環境から物質をとって来て自分の体内に入れる能力を持っていると言うことである。そしてその能力を駆使して活動し、外界の必要物を捉えて自分の体内に入れる。実は、この活動が一般には“生活”と考えら

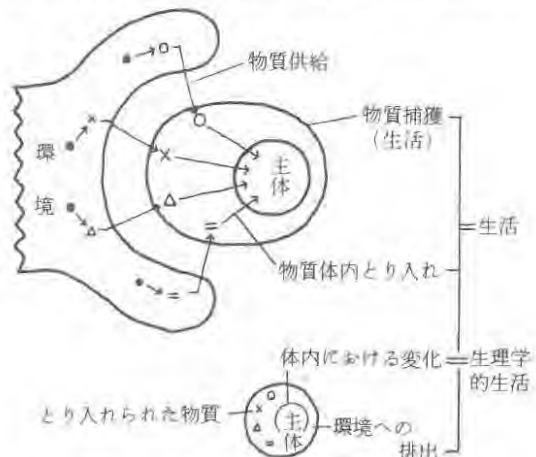


図-7 主体・環境・生活モデル

れている。生理学や生化学では、物質が体内に入って変化して身体をつくり異化されて体外に排出される過程を生活過程と言うようであるが、本論では一応外部の物質の流れについてだけ生活と言うことにしよう。これは図に示せば、(前頁)図のようになる。

ii) 人間の生活、(未生産・採取狩猟状態)

人間が動物の段階から脱け出した時には、どのような形になっていたか。まだ生産にはいたらなかったとしても、歩くためだけの足から分化した手で木や石を持ち、採取や狩猟をしてくらしていたし、そのため人々は協力していた。また、火の発見・調理の発明で外界から得たものは焼いたり煮たりされた。土器の発明や貯蔵の発明は、食物の範囲の拡大、食物供給の期間を自然が供給する期間よりもより長いものにした。このような操作は各人がめいめい行ったものではなく、炊事家事をする特定人が生まれた。こうして、食事の世話と言う行為が生まれ、或る範囲の人達が一緒に世話を受けるようになった。このように、食物獲得でもその加工消費でも人々は協同化集団化するようになった。これらの集団にはいろいろなものが考えられるが、文明人(文字を持った人達)が見聞して書き残したものでは、採取・狩猟のための集団は氏族一民族、消費のための集団は家族と言う形のものであった。勿論、氏族をなしていない小集団や離合集散するものも報告されているし、家族も必ずしも夫婦が単位でなくその複合したような形のものや、一定時間だけの夫婦等のものも見られた。また、老夫婦一若夫婦と言

う直系同居や傍系同居のものも見られる。しかし、とにかく食糧獲得にしてもその加工・配分・給食にしても何らかの集団で行動したことはあったと考えられるのである。これをモデル化して図に書いて見よう。(下図)

iii) 人間の生活、(生産状態)

人間が自然から供給されるものを、ただ受動的にうけとるのでなく、環境に手を加えて自然が自然に供給するものとは違ったものを供給させるのが“生産”である。勿論、自然から与えられたものでも、それに人間が手を加えることによって自然が与えてくれたままの形や性質ではないものを造り出すのも、“生産”の中に入る。この2つの物質流動の経路の変革によって、人間の社会は非常に変わってしまった。生活物質が豊富になり多くの人口を養えるようになったばかりでなく、人々が消費する以上の物資がつくられるようになった。しかし、こうなるとこの余剰を手に入れてその集団を支配しようとする人達が生まれる。勿論、“生産”をするためには、人々が孤立してそれを行なうことができるわけのものではなく、いろいろの人の協力が必要である。それも、実際の仕事つまり道具やそれを以てうまく運用すると言う技術や、それを施す対象である土地を媒介にして組織をつくりつながるし、またそのような組織と組織の結合も必要である。このような「人間」の結合は、“生産”の時代に入ると必要であり、誰かがその結合された組織の統轄と舵取りをせねばならなかった。これを進めていたのは技術を持ったもの、手段を持ったものであった。このような状態に

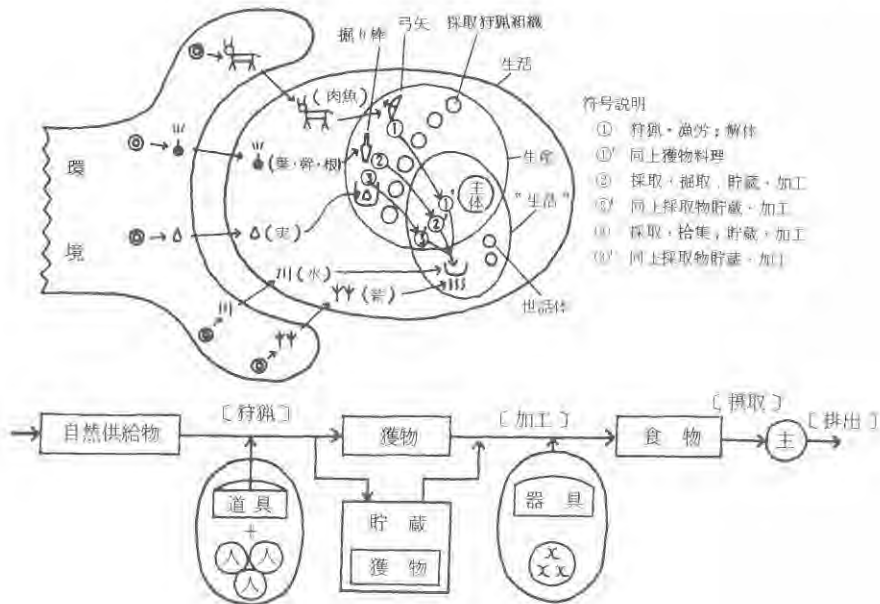


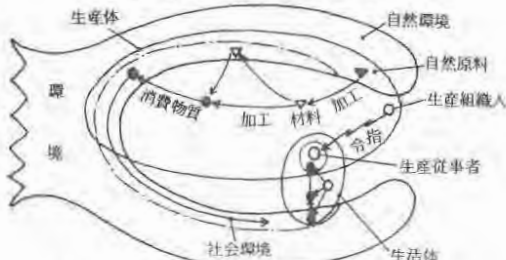
図-8 狩猟採取状態の図(上)とその流れ(下)

たもの、手段を持ったものであった。このような状態になることは、歴史的にはかなり急激に行なわれたが、実際には何世紀にもわたって完成されて行ったので、支配者は“支配し易いもの”を抑えることによって人々全体を個々でなく組織ごと抑えて行ったのである。この、“支配し易いもの”が生産手段であり、古代では土地と農耕具であった。土地は武力で確保し、農耕具は鉄の製錬や鍛冶の過程を握ることによって抑えた。これも武力で守られた。勿論、同様の対立勢力が他地方にあらわれ、互に勢力圏を伸ばそうとして競争することがあり、そのため武力が必要であったと言うことはある。が、基本的には支配を犯すあらゆる可能性に対して武力は準備されたのである。今見て来たように、“生産”の段階に入った人間活動は、環境の自然による物資供給の経路を変え、やはり自然の力を利用するのではあるが自然にはなかった人工の経路をつくり、自然が与えるものとは別なものを作り人間に与えるようにし、そのもの及び自然が与えたものも加工して環境が自然には到底与え得ないものをつくり出した。つまり、自然の循環をこわしたのである。この循環破壊は、或る程度まで自然の許容力によって全体の循環体制を守れるが、それが守れ得なくなる限度が

ある。これを、人間生活及びそのかかわりの環境の問題として見て行かなければならないのが、今日の課題であろう。

また、“生産”に入って人は、支配機構を生み出した。これは単なる組織運営機構ではない。これによって、支配者とそれに連なる人々・被支配者の間に生活の格差が生まれた。これを是正しようとする不満は常に存在した。支配者は、これを鎮めるため宗教の力を使った。しかし、被支配者は自分の生活を守るため、家族と言う力だけでなく、村落等共同体をつくり、そこで相互扶助をはかった。これは支配者に利用もされたが、生活者達の相互依存と相互扶助の体制でもあった。人々の間には常に差が生まれ、組織は常に分離し崩壊する危険が潜在していた。従って、このことも防がなければならない。このため人々は、集団（ムラ）を再組織・再強化する方法として、宗教や儀式・儀礼に頼った。この宗教は、支配者が勢威や慈悲を示すための宗教とは異なり、民衆のみんなの宗教であった。この二つが一致する時は、それが民衆の願望が社会変革を呼ぶ時のシンボルとなる時と考えられる。ともあれ、“生産”の時代は、環境変革・環境供給物の変革、それらの技術と組織、それらの組織の運営、組織・

生産：道具を以て環境の一部に深く進入、物資の流れを変えしその流れを変える。下図参照。



生産従事者（複数）は、原料・材料・製品にとり組み、原料加工・材料加工・製品輸送分配等の労働に従事する。かゝる人達も社会に廻っている製品を生活世話人を経て入手・加工・採取し、消費する。

図-9 「生産」〔生活〕の組織

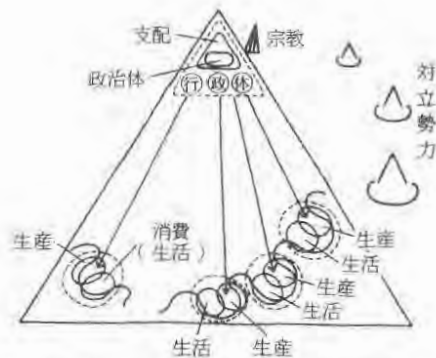


図-10 生産・生活と政治・行政等のモデル図

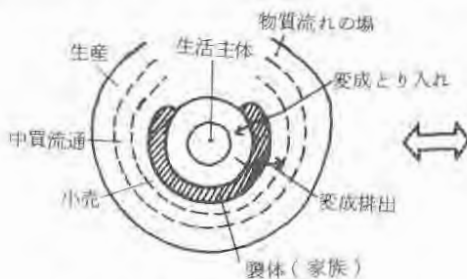


図-11 生活主体・生活と環境
その間に介在する変換体=嬰体(家族)



図-12

図-12 正獣類の胎児-胎盤・母体(子宮)の姿

組織の組織の支配、支配のための諸種の機能体〔行政・政治・武力（警察・軍隊）・宗教等）・貴族文化等の新たな出現をもたらしたのであった。空間的には、行政・政治・宗教・軍事・文化の中心としての都が建設された。

以後の発達は、この内容の変革はあったが形式は変わっていない。以上を図に示せば次のようになる。

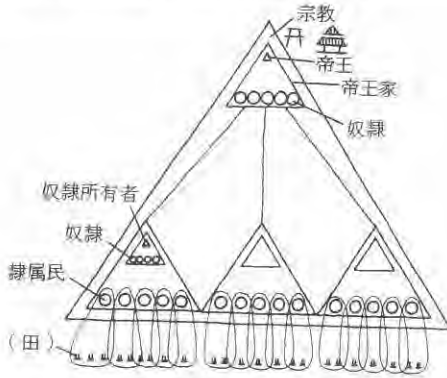


図-13 古代の生活組織（＝社会組織）

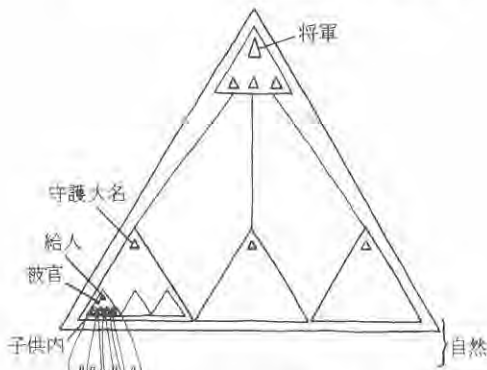


図-14 中世の生活組織（＝社会組織）

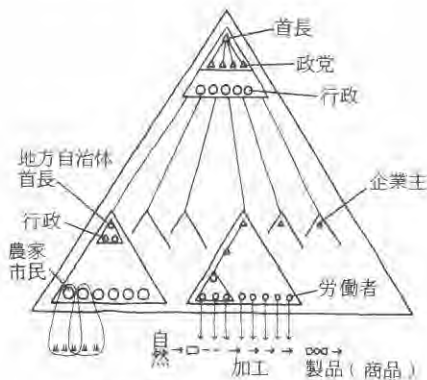


図-15 現代の生活組織（＝社会組織）

対立勢力は、古代には地方に併立したものが大勢あったが、国内統一してからは対立物は外国となった。現在も同じである。

上の図を、古代奴隷制・中世封建制・現代資本主義制の順に書いて見ると図-13、-14、-15のようになる。

2 異体論

—社会は有胎盤類の母体組織胎盤の外化に似ている—

1. 人間の身体

人類は哺乳動物に属している。しかもこの中で有胎盤類に属している。胎盤のない哺乳類には、例えば袋のないものや有袋類などがあるが、これらの動物では仔は小さい時に生まれ、母親の暖い腹部で乳を吸いながら育てられる。この母親の暖い腹部は毛がなく、血管に富み乳線が分化している。有袋類には腹の前に一枚口の開いた皮膚があり、仔をより手厚く保護できるようになっている。仔は、かなり成長し自ら餌をとれるようになってから親から離れる。つまり、“体外”にこのような“器官”を持つ哺乳類は、仔がかなり大きくなるまで親の保護がきく親の身体で育てるのである。

有胎盤類になるとどうか。仔はかなり大きくなるまで“体内”の“器官”で育つ。生まれて来た時には一般にすぐ歩けるし、餌をとって食べることでできるものもある。親や先輩から餌をもらって食べるものもある。このようになんか大きくなるまで体内で育ち、外に出た途端かなりの自己保持の活動ができるようになっている。しかし、社会の成員になるまでの訓練中も、一般的に自己の力で活動せねばならない。この点、猿の類は仔を母類の身体に掴まらせて移動する。かなり一人前になってから母親から離れる。母親は一定の組織を持った社会の力で守られている。人間の身体は、このような子供の生み方をする哺乳類と同じ身体の機構、特に有胎盤類と同じ機構になっている。

2. 人間の子育て

身体の機構が同様なら子育ても同様であろうか。人間の場合は、猿類よりもはるかに大きくなるまで子供を手許におく。これは、抱いたり背負ったり吊り下げたりの手先にくっつけておくのではない。すぐ近くで見守ったり手を差し出したりできるような距離に置いたり、夕方になったら引き取りに行けるようなところに置く。そして、他の動物と決定的に違うところは“家庭”と言う場を形成し、そこで生存・生産に必要な食物や就寝その他

学習・慰楽等を与えるのである。これらの生活をするには、自然をそのまま使って行なうことはできない。常に何らかの加工が必要である。この加工も人間は“家庭”で行なった。この中で、子供は“一人立ち”できるまで育てられた。一人立ちして生活するための訓練も、ここで学んだのである。他の動物よりも遙かに長い期間、親の保護の下にあり親と一緒に過ごす。そして、かなり成熟度が高くなって社会の成員になる。家庭は、母親だけの世界でなく、父親も兄弟姉妹更に祖父母時には叔父叔母等も同居する場所であった。

3. 人間の給食

社会に出た人間は、他の動物同様単独で社会に参加し、自ら餌をとり自ら食べて生きるのか。分っているように、人間は成人になると結婚し家庭を形成し、その家庭の中で加工食を供給され採食する。つまり、子供時代に親に養われるだけでなく、成人になっても家庭によって養われるのである。このように、生涯を通じて給食される形になり、他の動物とは違った生活形態になった。現在他の動物同様、成熟して親から離れて独立する生活形態は存在するが、これも他の動物のそのように、自然界に流れている物資を自らの足で近づき自らの口と手で捕食するのと異なり、下宿屋や食堂・食品店時には自らが社会の中に流れている物資を捕捉し・持帰り・加工して給食するのである。

4. 世話体

このように、自然または社会の中に流れている物資を捕捉し・持帰り・加工して給食することは、すべての人間にとって必要であり、人間に特有な生活形態である。これは人間が生み出した新たな“物質循環”の経路であるが、これを行なうのは母親なり母親代りなり何らかの人間のつくり出した役割組織で、流れる物質を捕捉・変成・給餌する“作用体”と見ることができる。この“作用”は普通“世話”と呼ばれる類のもので、従ってこの“作用体”は“世話体”と呼んでもよいであろう。これを行なう場が“家庭”である。

これまで、「食」についてだけ述べて来たが、「衣」や「住」についても同様のことが言える。この両者は、食と異なり身体の外物質である。食が“体内を通る”物質であるとするれば、衣・住は“体外を通る”物質と言うことができよう。この二者、特に衣は他の動物が持っていないもので、人間特有の生活物資と言うことになる。

5. 嬰体

このように、食・衣・住の生活物資は自然又は社会から変成されて消費する人間にまでもたらされるが、このような媒介的作用を営むのが“家族”と言う組織であり、“家庭”と言う場である。実は、逆に生活し終えて、そのために変質して出て来る排泄物や廃棄物等の排出物は、またこの家族・家庭の力で変成されて、自然または社会の物質の流れの中に還される。つまり、家族・家庭は生活主体（消費主体）のために「変成とり入れ」もすれば「変成排出」もするのである。これは丁度胎盤が母親の血を「変成とり入れ」して胎児に供給し、排泄物・老廃物等を「変成排出」して母親の身体の中の流れである血液に出してやるのに似ている。それで私はこの作用をする組織全体を胎盤の別名“嬰”と言う言葉を用い「嬰体」と名づけたのである。哺乳動物の中で、胎盤をそなえた動物は発達が高度の段階にあると言われるが、仔が体外に出てもこの胎盤（嬰）と同種の親の働きを長く保つ動物種で、発達の程度が高く、それが一生をおおうまでになったのが人間と考えられる。ただ、人間には性の期間が他の動物のように一定期間でないという特徴があり、これが上記の「嬰体」を持つ生活と同時にでき上っているところに家庭をつくる人間の更なる特色があると言えよう。

6. 生産・流通・生活・文化

また人間は、外界の物資の流れをただ自然の流れのままにまかせず、自ら手を加えて自然とは別の流れをつくった。後には手の延長である道具を使ってこれをつくった。つまり、「生産」である。そして、この「生産」を消費者自らが行なうのではなくて、人づてにそれを得る方法を完成した。これには古代・中世等に見られるような強制による人為的搾取の流通もあるが、交換によって行なう方法もある。交換も、物を生産するのに要する労働の量によって測られた価値を無視した、時には強制的な不等価交換もあれば、価値通りに交換された等価交換もある。このように強制にしる非強制にしる、不等価交換にしる等価交換にしる、人為的につくられた“生活物資の流れ”である。この流れには、人間が物をつくる時の道具・その他（技術・知識・情報等）も加わり、生活物資も食・衣・住等生命を保つためだけのものだけでなく、教養・娯楽等慰楽・文化・贅沢なものまで流されるようになった。更に、これらを統一する統合行為も加わったのである。

7. 母体の外化としての社会

このような、生活主体—嬰体—それをとりまく社会、

と云うように見て来ると、これは子供を育てる器官が外化して人間の一つの機関になり、更に生涯それを必要とするようになった人間の生活を全社会で支えるような組織になっている。これは、胎児を守り・養い・育てている有胎盤動物の身体の組織が外化してこのような形になり、より完成度の高いものになったと考えられるものである。

ただ、この組織はまだ未完成であるし、生活主体の生活の状況・生活への要求とその充足によって完成の形態は諸種のもの・諸種の段階が考えられる。これは、これから考えて行かねばならないことであろう。一つのヒントは“社会構成体”説で、これを生活発展との関連で考察して行くべきであろう。

(昭和57年11月9日受理)

Summary

It's needed for us to establish some new fundamental theory of living science for figuring out many problems on the real livings, such as pollution, poverty, problems of housing, problems of city life, problems of rural life, problems of health and so on.

I have a try to construct a new theory of living science which is called "YŪTAIRON" after the A. I. Oparin's "Life Science". This theory says that "Human Living" is one of the forms of material movement which contains man and things provided by human environments.

By applications of this theory to many living problems, such as farmhouse planning problems, sorting of farmhouse plan types and studying of rural lives, I find that it is rather effective for making clear of that sort of problems.

For educational system, I think the fundamental theory which someone should attain must be taken into severe consideration, and I believe the theory "YŪTAIRON" I have built up and developed is one of the fundamental theories.